## 2. おとりのかご

長い冬の間、はい色にくすんでいた足がら山の、山はだは、春の声を聞くと、急に尾根も谷も、一面に美しく、うすみどり色にぬりかえられました。

そして、日当たりのいい尾根の南がわで、山つつじのかたいつぼみが、あたたかい光にふくらんで、白い花びらを開くと、うら山の、じめじめしたさわのほとりでも、いちりんそうと、ふたばあおいが、うすむらさきと、べに色の、かわいい花をさかせました。

また、ひのき林のなかでも、高い木にからみついている山つぐみの、赤い花が、にっこりとほほえみました。

それから、川の水もぬるんで、春もなかばごろになると、谷川のつつみの上に、大きな葉っぱを広げている富士あざみが、むらさき色もあざやかな花を開きました。

そして、また、しばらくたって、野うさぎの石あなのある大くりの木のまわりでも、みどりにもえる草原に、き色い花のきれいなまんねんぐさと、むらさきの花の美しいたつみそうが、もう、すぐ、長雨のつゆがやって来ることを予言でもするように、あたり一面にさきそろいました。

こうして、いろいろな花が、つぎつぎに、さきかわるごとに、山の動物も、きせつのうつりかわりを知ることができました。

野うさぎの家ぞくは、小さいはこべの花が、みどりの草むらのなかに、黄色い花びらをのぞかせるようになったころから、毎日毎日、石あなから飛び出して、草と花のにおいに包まれながら、はねたりとんだり、また、親うさぎは、子うさぎたちに、てきからにげるための方法と、うさぎのしゅうかんやくらし方を、だんだん教えていきました。

そうです。うさぎは、ほかのけものと、あらそうことをこのみません。もしも、おそろしいてきに出会った場合には、すぐに、物かげや草むらにかくれて、ジグザグと風しもの方へ大まわりして、あい手の思いもよらない所から、鳥の飛ぶような早さで、自分たちのすへにげて帰ります。

ある日……

子うさぎのヤトは、あまり遠くのほうまで、まわり道し過ぎて、つかれてしまったので、しばらく休んでいこうと、しゃくなげの木の根もとで、うすべに色の花をながめていると、つゆ空は、急に雨になって、ポツリポツリふってきました。

いくら、子うさぎのヤトでも、だんだん大きくなって来たので、しゃくなげの花の下では、雨やどりができません。それに、つゆ時の雨は、ふり出すと長引くので、いそいで石あなへ帰ろうと、花の下から雨の中へ出てみると、いよいよ本ぶりになってきました。

で、ビショビショどろんこになりながらはねて帰ると、その帰り道のおかの上に、ぐっしょり雨にぬれたひめゆりが一本、ふくらんだつぼみを、今にも開こうとしていました。

つゆの雨は、草木にとっては、めぐみの雨ですが、野うさぎたちは、雨のなかでは、運動も草かりもできません。それで、石あなのなかにとじこもって、雨の晴れる日を待っていました。

しかし、こんな間にも、さわのほとりや林の日かげの、ごみごみしている場所では、さなぎのなかから、新しい虫のなかまがうまれていました。

やがて、つゆがあけると、すぐ、山は夏です。青々とせだけをのばした草のなかから、ほたるぶくろ、やぶむらさき、つりがねにんじん、そして、ききょうが、うすむらさきの花を見せてくれました。

また、ふかい草むらのなかでは、ばった、つゆむし、きりぎりす、かまきりなどが、草色をした自分たちのからだでは、だれにも見つかるまいと安心して、とんだり歌ったり、大さわぎをしていました。

だが、それも、夏の間だけのできごとで、だんだんかれはじめた草むらのかげで、すずむしやまつむしが、さびしい声で鳴き出すようになると、あのおかにもこのおかにも、おみなえしのき色い花が

さいて、ふかいふかい谷ぞこの、岩間のところどころに、あきちょうじのうすむらさき色をした花が、ちらほらするようになります。また、すみわたった青空に、さわやかな風がふいて、ゆらゆらすすきのほが、しずかにゆれていました。そして、そのころになると、足がら山にも、実のりの秋がやってきます。

で、大くりの木の枝々にも、くりの実が一ぱい、すゞなりに実のりました。

足がら山に秋がきた
き色い月にてらされて
みんなわになれうさぎの子
ペッタ、ペッタン
ペッタ、ペッタンもちつきだ
ちょうしあわせてきねつこよ。
(曲譜スカウティング誌五七号一頁)

うさぎのなかまは、大昔から月を、神様だと、うやまっていました。

それで、ヤトは、もう、ぽつぽつ冬毛にかわろうとしている着物を、きちんと着て、お月様をていねいにおがんで……

「ことしはどうぞ、くりの実が、ぶじに取入れできますように——」
と、おいのりをしました。

それは、毎年、この月のまん月が、三日月がたにかけはじめると、となり山の矢倉岳から、いたずらざるが数十ぴき、むれを組んでおそってきて、大くりの木の、くりの実を、一つのこさずさらっていくので、大くりの木のまわりに住んでいるりすや野うさぎや、その他のけものたちは心配で心配で、毎日毎晩集まっては、どうしたらよいだろうかと、山ざるをおっぱらうそうだんを続けていました。

そこで、今日も、おしゃべりの父りすが、第一番に口を出して……

「うさぎさん、うさぎさん——あんた方は、私たちとちがって、山ざるにもまけないほどからだが大きいから、一つ、ことしは、さるどもとたたかってくださいませんか——」
と、いうので、父うさぎが、野うさぎの家ぞくを代表をして、

「でも、私たちは、平和をあいしていますから、そんなぼう力は、きらいです——山ざるだって話し合えば、なんとかうまく、話し合いができると思うのですが——」
と、父うさぎは、どこまでも平和に話し合いをしようという意見です。

だが、父りすは、小さいからだを、むりに大きく見せながら……

「話し合いですむなら、とっくの昔に、話がついているはずですよ——では、仕方がありません。くりの木のまわりに住んでいられるみなさん——いよいよ、山ざるどもとたたかわねばなりませんぞ！」
と、からだより大きいしっぽをふりふり、からげん気で、しかも早口で、そうさけびました。

すると、他のけものなかから……

「じゃぁ、私らは、きのぼりができないから、木のぼりじょうすなりすのおとうさんに、一番がけをやってもらったらいいじゃありませんか——」
と、からかい半分に、大きな声でさけぶ者がありました。

これには、父りすもおどろいて、こんどは、ちぢかまるようにしっぽをまいて……

「いえいえ、わたしらは、こんなにからだが小さいから、一番がけなんぞ、とんでもない、とんでもない――」
と、だんだん小さい声で、つぶやくようにいいながら、後ずさりしてかくれてしまいました。
こんなことでは、いつまでたっても、話し合いができそうもないので、きょうもまた、話がまとまらないうちに、みんなは帰ろうとしました。
すると、そのとき、みんなの前へ、ヤトがピョンピョンはねて出て……
「みなさん、待ってください。――ぼくは、このとうげで、矢倉山の山ざるを、こらしめてくださる方は、金太郎さん以外にはないと思います――」
と、自信ありげに発げんしたので、みんなも思い出したように……
「そうだった――金太郎さんのことをわすれていた」
「そうだ。そうだ――」
「金太郎さんに、助けてもらおう――」
「こんなときには、人間の力をかりるにかぎりますよ」
けものたちは、金太郎が、ただ一人で、長い丸木橋をかけたことを知っていたので、みんな口をそろえて、ヤトの意見にさんせいしました。
そして、みんな口ぐちに……
「すみませんが、こうさぎさん、あなたから、金太郎さんに、おたのみしてくださいませんか――」
「みんなを助けると思って、金太郎さんの家へ、たのみにいってくれませんか――」
そういって、ヤトにたのみましたが……
ヤトは、まだ金太郎の家へいったことがありません。でも、金太郎にたすけてもらわないと、ことしも山ざるのために、くりの実を一つのこさず、みんなさらわれてしまいます。
で、ヤトは、金太郎が来るのを待っていても、いつのことかわからないので、こちらから金太郎の所へ行くことをけっ心しました。それは、丸木橋を向こうへわたれば、金太郎か、ジロッポの足あとが、のこっているだろうから、その足あとをおって行けば、金太郎の家へ行き着くだろうと思ったからでありました。
そして、丸木橋のなかほどまで、ピョンピョンはねて行きましたが、山のぼりでは、ジロッポに負けないヤトも、丸木橋の上から、ふかい谷川を見おろすと、足がすくんでしまって、もう前へも後へも、はねることもとぶこともできません。
そして……
「しまった――」
と、思ったときは、足をすべらして、でんぐり返って、急流へおちていました。
さあ、たいへんです。
ヤトは、まだ、およぎを知りません。流れにのまれて水をのみ、いきもつまりそうです。もがきにもがいて、流れを前足でかき、水を後足でけると、やっと顔だけが、水面にうかびあがりました。だが、少しでもゆだんをすると、すぐ頭からしずんでいきます。
で、一生けんめいに四本の足に力をこめて、水をかいたり、流れをけったりしていると、顔もうかんで、少しづつ前へ進んでいくような気がしました。
それで、また、げん気を出して、向こう岸へおよぎ着こうとしましたが、水のつめたさとつかれとで、足の自由がきかなくなって流れにのまれ、ついになんにもわからなくなってしまいました。

それから、しばらくたって……

ヤトは、ゆめうつゝのうちに、なんだか、ポカポカからだがあたたまる感じがしたので、目を細く開いて見ると……

そこは、くまの岩屋で、こぐまのツキノワといっしょに、母ぐまにだかれてねていました。

そして日なたぼっこと、せいけつずきなくまの岩屋は、南向きの岩と岩とのすき間から、キラキラ強い日ざしがさしこんで、ねどこのしき草も、よくかんそうしてあたたかでありました。

ヤトは、はじめ、母ぐまにだかれていたので、ちょっとおどろきましたが、ツキノワがそばから……

「ヤトさん、どうしたのだ――もう少しでおぼれるところだったよ――しばらく、ぼくたちの岩屋で休んでいくがいいよ」と、いってくれたので、ヤトは安心して……

「ありがとう――」

そういって、ツキノワのほうに頭をさげると、

「いや、ぼくが、助けたのじゃない――おかあさんが、流れでおぼれていた君を岸へひきよせて、口にくわえて岩屋まで運んでくださったんだよ」

と、ツキノワは、母ぐまの顔を見て、ニッコリとわらいました。で、ヤトも母ぐまのほうへふり返って……

「ありがとうございました」

と、ていねいに礼をいいました。

すると、母ぐまは、

「私が、来合わせてよかったですね――で、また、どうして丸木橋なんぞ、わたろうとしなさったんですか――」

と聞いて、ヤトが丸木橋をわたろうとしたことまで知っていたので、矢倉岳のいたずらざるの話をくわしくしました。そして、こんどは、ツキノワのほうへ……

「――それで、金太郎さんに助けてもらおうと思うんだが、ぼく、どうしても丸木橋をわたることができないから、ぼくにかわってツキノワさん、このことを、金太郎さんにたのんでくれませんか――」

といって、ピョコンと頭をさげました。

すると、母ぐまも、さんせいするように……

「このとうげの、くりの実を、よこ取りするような山ざるたちは、お前も手つだって、こらしめてやりなさい」

と、ツキノワへ、きつくいって聞かせました。

そこで、ツキノワがかわって、金太郎の家へいくことになりましたが、そうなると――ツキノワの足には、立木にものぼれる強いつめを持っているので、長い丸木橋でも、平気でわたっていくことができました。

が、ツキノワも、まだ一度も、金太郎の家へいったことがありません。

で、ヤトと同じように、よくかぎわけることのできるはなで、金太郎やジロッポのからだのにおいをかぎつけながら、どちらの足あとでもよいから、足あとはないかと、金太郎とジロッポが、いつもやって来る尾根の上へのぼっていきました。

くまは、いつもなら尾根の上を通るようなことはしません。かならず尾根のどちらがわかの谷間をいくのがしゅうかんです。だが、きょうは、そんなことはいっておられなかったのでしょう。

そして、やがて、尾根の上へのぼり切ると、そこからは川向こうの遠くのほうまで、よく見わたすことができて……

谷川は、くまの岩屋を少しくだったあたりから、北のほうへ大きく折れて、川はばが広くなると、まがりくねりしてゆるりと流れていました。そして、川の手前のこんもりとした森かげから、白いけむりが一すじ、高く立ちのぼっているのが見えました。

「あっ、金太郎さんの家だっ」

と、ツキノワは思わず声を立てました。

金太郎は、ツキノワから、いたずらざるの話を聞くと、ジロッポもよんできて、山ざるをこらしめる方法を話し合いました。

そして金太郎は、

「さるのむれが、やって来ない前に、早く、くりの実を取り入れておいて、おとりのかごを作って、さるをこらしめてやろうと思うが――」

と、そうだんを持ちかけると、二ひきももちろんさんせいしました。

で、金太郎は、竹やぶから七、八本も、太い青竹を切ってきて、細く長く竹をわると、これで大きなかごをあみました。また、ツキノワとジロッポは、森の中にわけ入って――ツキノワが高い木の上にのぼって、ふじづるを前足のするどいつめでかき切ると、ジロッポが木の下で、つるの根をかみ切って引っぱり、ふじづるを、なん本もなん本も、エッサエッサ川岸まで運んできました。

よろこんだ金太郎は、そのふじづるで、細いなわと太いつなを、長く長くなって、そのなわとつなのはしを、がけに近い杉の木にむすびつけ、なわとつなとが、もつれないように丸木橋をわたって、ふかい谷川の上へ、二本のつり橋をかけました。

そして、また、細いなわのさきを、かごのつり手にむすんで、太いほうのつなは、つり手に通して、そのはしを大くりの木へしっかりとむすびつけました。

これで、仕事が終わったので、けものたちの家ぞくは、みんな出てきて……

足がら山のくりの木に
いがぐりぼうずがなったので
お山のけものはくりの実の
はじけておちるを待ちました。

と、歌いながら、くりの木のまわりを、ぐるっと取りかこみました。

そこで、金太郎は、くりの木の太いみきを、両うでかかえ……

「よいさっ、よいさっ、よいさっ――」

かけ声とともに、力いっぱいゆさぶると、みんなの頭の上から……

パラパラと、くりの実があられのようにふってきました。

さぁ、けものたちは、大よろこびです。

お山のけものはくりひろい
さあさみんなでくりひろい
足がら山のくりの実は
みごとにうれてはぜました。

(曲譜スカウティング誌五五号一頁)

みんなげん気に歌いながら、取り入れにかかりましたが、

さて、くりの実を、りすや野うさぎのすへたくわえると、いたずらざるがやってきて、高い木の上のすでも、石だたみの間のすでも、たちまち、たたきつぶされてしまいます。

で、りすの母親と、野うさぎの母親は、また心配になってきて……

「山ざるは、私たちの所へは、すぐ、のぼってきますから、心配なことです」

「私たちの石あななども、わけなく、たたきくずされてしまいますので――」

二ひきが、どうしたらよいだろうかといった顔つきで話し合っていると、これを聞きつけたツキノワが……

「では、ぼくたちの岩屋へ、くりの実をあずけなさい――山ざるどもが、おしよせてきても、とうさんぐまの一たたきで、どんな大ざるでも、たたきたおしてくれますよ」

と、こともなげにいいました。

すると、そばから父ぐまも、

「ハヽヽヽヽ、それがいい、それがいい、――みなさん、くりの実は、私が身にかえても、かならずまもってあげますよ」

そう、カラカラわらって、力強くいってくれたので、みんなは、くりの実を、くまの岩屋へあずけることになりました。

そうして、けものたちが、くりの実を岩屋へ運んでいる間に……

金太郎は、いがのついたままのくりの実を、百こばかり集めてかごに入れ、さるの手首がはいるだけの、あみ目にあんだかごのふたを、ふじづるでしっかりとむすびつけました。そして……

「さぁ、できあがった……」

と、向こう岸のジロッポへ、高く手をふって合図すると……

ジロッポは、杉の木にむすんでおいた細いなわのほうをくわえて、テクテク歩き出しました。

で、おとりのかごは……

太いつなをつたわって、谷川のがけとがけとの中間へ、するする引っぱられて、ふかい急流の、ま上にぶらさがりました。

これで、おとりのかごの用意が全ぶできあがったので――けものたちも、金太郎も、自分のすや家に帰って、その日の夕ごはんは、一年ぶりでくりの実のごち走に、みんな舌づつみをうっていました。

が、ちょうどそのころから、急に、強い風が吹き出して、夜になると、とうげも谷も、ゴーゴー山鳴りがして、足がら山は、森も林も、大あらしになってしまいました。

だが、そのよく朝は、すがすがしい秋晴れで、山ぎりがはれてしまうと、朝日にてらされた富士の山が、美しいすがたをくっきり現わしました。

そして、森や林から……

「カッコー、カッコー」

早起き鳥のかっこうが、とうげのみんなを起こしてくれました。

ヤトも、かっこうのげん気な声に目をさまし、つみ石のすき間から、ピョンピョンはねて出て、朝のくう気をむねいっぱいすうと、ていねいにおじぎをして、

「お日様、お早ようございます――お山もお早ようございます――」

と、たい陽と富士の山へ、朝のあいさつをしてから、思わず、大くりの木を見あげて、

「あっ、大きなさるがいるっ」

と、高い枝の上に、大きなさるを、一ぴき見つけました。

この大ざるは、物見のさるです。

毎年、秋のこのごろ、あらしのよく朝にはかならず、むれを組んでおそって来る矢倉岳の物見の親ざるです。

さるは、昨夜の大あらしにもかかわらず、くりの実が、一つもおちていないので……

「おかしなことも、あるものだ――」

と、ふしぎそうに、キョロキョロあたりを見まわしていましたが、しばらくして、風に乗ってきたくりのにおいをかぎつけ、おとりのかごを見つけだしました。

「あっ、向こうの、かごのなかにあるぞ――」

と、くりの木からとびおりると、身がるにつり橋をつたって、かごの上にとび乗りました。

そして、親ざるが、

「キッキー！キッキー！」

一声、二声、さけび声を高くあげたかと思うと、森の向こうから……

大ざる小ざるが現われて、みんなつり橋をつたってかごにとび乗り、ふたのあみ目から手をさしこんで、くりの実を引っぱり出そうとあせりました。

が、くりの実をつかんだ手首が、あみ目からぬけません。

くりの実をはなせばぬける手首を、よくふかざるは、くりの実をはなさないで、かえって強くにぎりしめたので、いがが、手のひらへつきささって、いたくていたくてたまりません。

さるたちは、もう半気ちがいです。

で、かごを強くゆさぶって、大あばれにあばれると、それにつれて、つり橋も大きくゆれ出しました。

そのうえ、後から後へと、大ざる小ざるがやって来て、くりの実をとりあい、長いつり橋の上で、見ぐるしいなかまあらそいを、そうぞうしくはじめました。

大ざるは、小ざるをかきのけ、また、小ざるも、大ざるに負けまいと、かきあい、かみあって――大ざるは、小ざるをしかりつけて……

「小ざるは、あぶないから、後からだ後からだ――」

と、大声でどなると、小ざるは、

「大ざるは、ずるいぞ――小ざるにも、けん利があるんだ――」

小ざるも、なかなか負けてはいません。

すると、また、大ざるが、

「小ざるのくせに、なま意気なっ」

と、大ざるばかりで、くりの実を全ぶ取ろうとするので、

「大ざるは、おうぼうだぞっ」

そう、おたがいに、口あらそいをしてから……

「この、小ざるめ！」

と、大ざるに、強くけりとばされた小ざるが一ぴき、つり橋を、つかみはずして……

「助けてくれ！――」

と、さけびながら、谷川へおちていきました。

そうしたあらそいが、しばらく続くと、山ざるの重みと大さわぎに、太いつなのつぎ目も、だんだんゆるんで、ついに、まんなかから、ぷっつりと二つに切れて……

「うわっ！！――」

「つり橋が切れた！――」

大ざる小ざるは、切れたつなの両はしにしがみついたまま、じゅずつなぎになって、ドー！！と、ひゞきを立ててなだれのように、みんな谷川へおちていきました。

山のさだめをまもらないで、よそのとうげのくりの実を、よこ取りしようとした矢倉岳の山ざるは、自分たちのよくで、自分たちがこらしめられました。

しかし、山ざるは、およぐことができるから、急流におちても、おぼれることはありません。

でも、来年からは、これにこりて、このとうげのくりの実を、よこ取りに来るようなことはありますまい。